

学習指導の成果をさらに生かすために

今、改めて見直したい 「読書」のチカラ

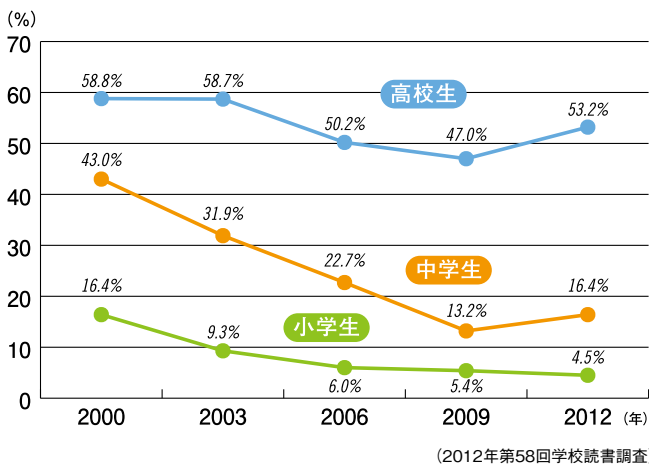
学習活動の中での「読書」の効用については、
すでに多くの先生方がご存じのことでしょう。
今回は、読書活動がもつすぐれた特長について、
静岡大学大学院教授で全国学校図書館協議会理事の村山功先生を取材。
指導にすぐに生かせる読書活動の実例やヒントについて
ご紹介いただきました。

取材・文 | 甲斐ゆかり(サード・アイ)、金丸敦子 イラスト | あきんこ

●子ども読書活動推進基本計画の経緯

2001年12月	「子どもの読書活動の推進に関する法律」成立
2002年8月	「第1次基本計画」閣議決定
2008年3月	「第2次基本計画」閣議決定
2011年9月	「国民の読書推進に関する協力者会議」報告書
2012年12月	「図書館の設置及び運営上の望ましい基準(告示)」改正
2013年5月	「第3次基本計画」閣議決定

●1か月に1冊も本を読まない子どもの割合



1か月あたりの 子どもの読書量	高校生	1.6冊
	中学生	4.2冊
	小学生	10.5冊

(出典：同上)

読書活動の現状

子どもの読書活動は、言葉を学び、感性をみがき、表現力を高め、創造力を豊かにし、人生をより深く生きる力を身につけるうえで欠かせないものです。

2001年に、読書環境の整備を積極的に推進するため、「子どもの読書活動の推進に関する法律」が成立しました。それにともない、国による「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画(基本計画)」の策定や、4月23日を「子ども読書の日」とすることなどが定められました。基本計画においては、2002年に第1次、2008年に第2次が閣議決定され、2013年5月に第3次基本計画が閣議決定されました。

第2次基本計画期間における取り組みをみると、図書館数が2011年で3274館と最高となったほか、児童室をもつ図書館が増加。図書館の児童への貸出し冊数も過去最高となりました。また、図書館での読み聞かせボランティア数が増加するなどの成果もみられます。学校では、全校一斉の読書活動を行う学校の割合が増加し、とくに、朝の始業前に行う「朝読書」は、小学校では、2012年には91・6%にまで普及しました。

一方、左のグラフのように、依然として学校段階が進むにつれて読書離れが進む傾向がみられます。第3次基本計画では、子どもの読書活動を支える環境のより一層の整備が望まれます。



PROFILE

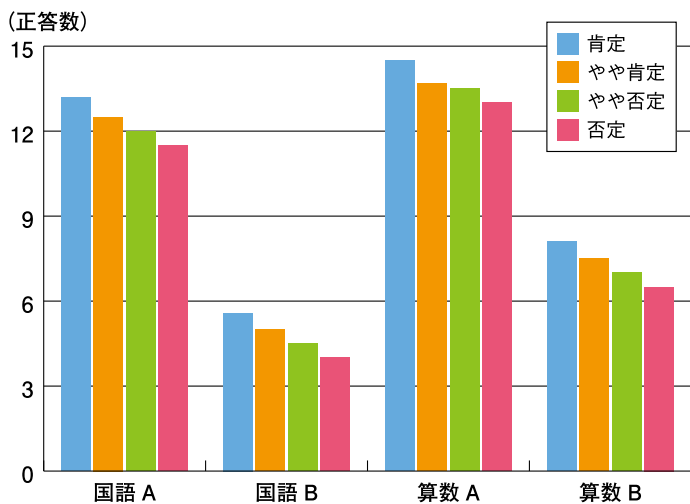
村山 功 先生

Isao Murayama

静岡大学大学院教授で公益社団法人「全国学校図書館協議会」理事。平成21年度文部科学省委託調査研究のひとつ「読書活動と学力・学習状況の関係に関する調査研究」の研究代表者。



●「読書は好きですか」への回答と平均正答数



(平成21年度全国学力・学習状況調査(小学校)の分析より)

●読書時間・学習時間と「国語A」の平均点

平日の勉強時間	平日の読書時間					
	2時間以上	2時間未満	1時間未満	30分未満	10分未満	なし
3時間未満			13.54	13.43	12.89	12.59
2時間未満	13.00	13.15	13.19	13.14	12.62	
1時間未満	12.37	12.68				
30分未満	11.64	11.93				
なし	10.43					

一定時間を勉強と読書に使うなら、全部を勉強に使うより、読書もしたほうが、教科の学力は高い。

(出典：同上)

学力と読書活動との関連は

一方、読書活動と学力との関連性については、いくつかの調査などによって、その有用性が推測されています。基本計画における読書活動などの全国的な取り組みによって、朝読書などが普及しましたが、PISA（OECDによる学習到達度調査）によると、日本の子どもの読解力は、2006年は57か国中15位、2009年は65か国中8位、2012年は65か国中4位と、徐々に順位が上がっています。

「全国学力・学習状況調査」の分析でも、読書好きであることは、教科の学力と極めて強い関係があることが明らかになっています。

これらことから、読書活動は、学力向上にダイレクトに反映されるとはいえないかもしれませんが、教科の学力を支援する「見えない学力」として有効であることがわかれると思います。

「全国学力・学習状況調査」の分析でも、A（知識問題）・B（活用問題）の問題別にみても同様で、読書好きの子どもの方が高い正答率を示しています。さらに興味深いのは、読書時間と学習時間の割合と、学力調査の得点の関連をみた分析です。平日に2〜3時間勉強し、全く読書をしていない子どもより、平日に1〜2時間勉強し、30分〜1時間読書をした子どものほうが、「国語A」の平均点が高いという結果が出ています。

学力の向上につながる

読書活動とは？



質のよい読書活動には
読書指導と学習指導が必要

学校図書館には、読書センターとしての機能と学習情報センターとしての機能があります。したがって、質のよい読書活動を行うためには、読書指導と学習指導が必要です。

読書指導は、子どもの成長に合わせて読書の質を高めるとともに、幅を広げていくのが基本。必読図書を設定し、読破した子どもを表彰するなどし、易しいものだけでなく学年相応の本も読むように促す読書指導が求められます。

また、自分で本を選んで読むと、どうしても分野が偏るものです。特に子ども

は、関心のある分野のみに集中し、なかなか他の分野に目がいきません。そこで、教師ができるだけいろいろな本を読むように指導する必要があります。最近の図書館は、貸出し状況がデータベース化されています。これをグラフ化し、子どもが自分自身でどの分野の本を何冊読んだかがわかるように示し、自主的に読書の幅を広げていけるようにするとよいでしょう。

一方、学習指導としては、ほとんどの学校が図書館の利用指導を行っています。これに加え、図書館の資料を使いながら「総合的な学習の時間」の活動などを行うことで、議論する力や物事を批判的に考える力が養われます。

「読み聞かせ」で大切なのは
コミュニケーション

子ども向け教育番組『セサミストリート』をご存じでしょうか。これは、アメリカで低所得者層の家庭の子どもが一般家庭の子どもと読み書き能力に差がない状態で就学できるように制作された番組です。ところが、実際には思ったような成果が出ませんでした。理由は、低所得者層の子どもは、番組を楽しく見るものの、その後、大人と番組について会話するなど、コミュニケーションの機会が一般の家庭に比べて少なかったからです。

読書も同じで、ただ読むだけでは「おもしろかった」で終わってしまいます。最初はそれでもよいのですが、だんだんと話が複雑になってくると、流し読みでは内容を追えなくなってきます。

学校によっては読書ノートを作り、たくさん本を読むように指導しています。しかし、特に低学年においては、子どもが一人で読んでいるのでは効果が低く、読み方を身につけるには、大人や兄弟と一緒に読み、内容について会話することがポイントになります。同じように学校で先生が読み聞かせをする時も、読んで終わりではなく、問いかけをすることが大事です。読書を通してコミュニケーションの機会を工夫してほしいと思います。

作品の「読み方」がわかる
指導が大事

「読み方」を指導する科目といえば「国語」。しかし、作品を場面ごとに区切って深く読み込ませる指導が中心では、「読み方」を教える部分が多少、弱いといえます。

例えば、中学年の読み物教材『一つの花』（著・今西祐行）。授業では、「お父さんはなぜゆみ子に花を一輪だけあげたのでしょうか？」という設問がよく使われます。しかし、「読み方」を指導するには、場面の変化によってお父さんの心情がどう変化したのかを問わなければなりません。

算数であれば、計算の仕方を習えば別の問題でも解答できます。同様に、国語ならば、場面を比較することで作品がどのように読めるといったように「読み方」を教えていかないと、子どもたちは何を学んだのかわからず、授業の満足度は低くなります。

本来、いろいろな「読み方」を伝え、教えるのが国語の授業です。「読み方」を学べば、子どもたちはそれを使って初めて出会う文章も読めるようになります。そうした「読み方」の指導には、『読書へのアニメーション』や『単元を貫く言語活動』（著・水戸部修治／明治図書出版）が参考になると思います。



本選びには学校司書の力をフル活用しよう

読書の質を上げるため、多くの学校は、「この学年ならこのような本を読んでもほしい」と、必読図書を設定しています。本の選定に当たっては、地域の状況に合わせて必読図書のリストを作っていけばよいと思います。

各教科の授業では、テーマに関連した本を何冊か紹介するというように、ブックトークを導入に利用するケースがあります。そこでどんな本を選べばよいで



しょうか。実践例でも紹介していますが、千葉県では市内の学校の学校司書のノウハウを集結させる試みが行われています。市内の公立図書館と学校図書館がネットワークを作り、「このような授業を行うので本を貸してください」と依頼すると、各学校の司書が本を探して送ってくれます。書名ではなく、授業内容でリクエストすることで、その教員が知らない本も利用できるのは大きなメリットです。

読書活動には定番の手法が数多くあります。また、ブックトークに関する本も多数出版されているので、参考にするとよいでしょう。



ストーリーテリング

語り手が物語を覚え、本を見ずに子どもに語って聞かせるもの。子どもは視覚に頼らずに頭の中でいろいろな場面を想像しながら聞くことができる。



ブックトーク

あるテーマにそって、何冊かの本を順序だてて紹介すること。クラス単位のまとまった集団で行うことが多い。テーマを決めたら、さまざまなジャンルから本を選び、子どもの興味を引くようなシナリオを作成する。その本が読みたいという気持ちを起こさせたり、本や読書の楽しさを知らせたりすることが目的。



アニメーション

本が読めない子ども、本に背を向けた子どものための読書教育法。指導者は読み方を教えるのではなく、子どもの読む力を引き出すことに徹する。みんなと同じ1冊の本を読み、読み終わった本でねらいに応じた「作戦」をひとつ行う。「作戦」には、「わざと間違えて読み、間違いを発見させる」「章のタイトルと章を合わせる」などの活動がある。

知っておきたい 効果アップの指導術

明日からの指導に 生かせる実践例

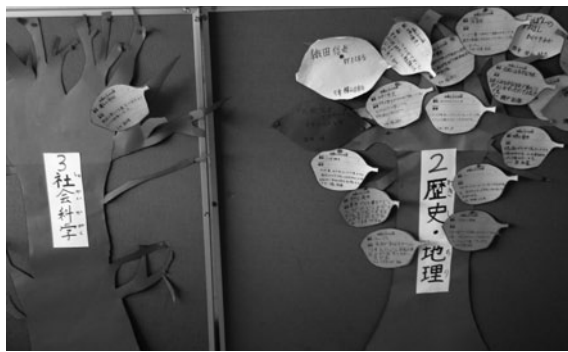
最後に、実際に行われた読書活動の例や、指導のヒントになる書籍などを紹介します。ぜひ、明日からの指導に生かしてください。

(平成21年度文部科学省委託事業「学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究」より引用)



◀お気に入りの本の一言感想を書き、日本十進分類法の分類ごとの「読書の木」の枝に貼りつけていく。

▲▶9類の文学・物語の感想は、幹や枝が見えなくなるくらい多いが、3類の社会科学、8類の語学の感想は少ないのが一目でわかる。



「読書の木」で読書意欲を高める
読書の幅を広げる読書活動に、児童が読んだ本の中から友達に推薦したい本について短い感想を書き、教室の前や廊下に貼るといったものがあります。他の児童の感想をきっかけに、今まで興味なかった分野に目を向けたり、違う見方や新たな発見ができたりします。

この学校の場合は、「読書の木」として、日本十進分類法の1から9の分類別の「読書の木」の枝に、一言感想を葉っぱのように貼っていき、どんどん木を大きくしていくのがユニークな点です。この方法だと、どの分野の本が多く読まれているかが一目瞭然。子どもたちは、読んでいる人が少ない分類の本を読んで感想を貼ってみようと、読書意欲を刺激されます。また、子どもたちを日本十進分類法になじませるにも有効です。

読書に関する取り組み

- 全校一斉の読書時間を実施
- 読書目標を設定
読書量を増やし、読書に興味をもたせるための目標を設定。
- 読書郵便を実施
気に入った本やおもしろかった本などをはがきを書いて送る読書郵便を、児童から児童だけでなく、児童と保護者の間でも実施。

学力向上に関する取り組み

- 学習・情報センター化
児童が調べた成果やパンフレット類をファイル資料として整理・保存し、学校図書館を「学習・情報センター化」する。
- 図書館利用指導の実施
図書館利用指導計画系統表を作成し、学年に応じた図書館資料の活用の仕方を指導。
- 主体的学習の場として活用
司書教諭、学校司書、図書委員が中心になって、机・椅子の並べ方、書架の配置、掲示などを工夫し、学校図書館を児童の主体的学習の場として活用。

A県A市立A小学校

●学校図書館賞大賞受賞校の実践をそのまゝ紹介。クイズに挑戦して図書館の基本が学べる。



編/山形県鶴岡市立朝陽第一小学校
国土社
¥2,500+税

「図書館へ行く! 図書館クイズ」

●授業で行うブックトークについて、単元や教材に合う展開例や実践例を豊富に掲載。



監修/鈴木喜代春
編集/ブックトーク研究会
一声社
¥1,500+税

「新版・授業が生きるブックトーク」 児童書を使った楽しい授業指導案

●子どものための集団読書法「アニメーション」の手法を解説。



著/M・M・サルト
訳/宇野和美
監修/カルメン・オンドサバル+新田恵子
柏書房
¥2,800+税

「読書へのアニメーション 75の作戦」

使える!
読書活動のための
参考図書

市全体の図書館ネットワークと本の物流システムを確立

1校の学校図書館の蔵書数には限りがあり、授業で使おうと思うと、全員にいきわたるだけの冊数が揃わないものです。

そこで、千葉県市川市では、公共図書館と市内の小中学校の図書館の間で本の貸し借りを行っています。図書の新着出しを希望する教師は、教科・単元・利用学年・利用の仕方を記入し、基本的にメールで依頼。本は、週2回配送業者が全校を巡回し、配送するので、貸し借りの手間も軽減されます。貸し出し依頼に際しては、書名ではなく、教科と授業内容で行うことにより各学校の学校司書の知識やノウハウも活用できる物流モデルといえます。

また、袖ヶ浦市でも同様の図書の貸し出しを学校図書館支援センターのウェブサイトでを行っています。ウェブサイトをj利用することで、同じ本ばかりが集まるといったことが避けられます。また、借りた学校は授業で使用した後に借りた本についてのコメントを書き込みます。これによって本の特徴や活用の仕方をまとめたブックリストが自動的にできるので、次に同様の授業を行うときの参考資料になります。

- 市川市学校図書館支援センター事業
<http://www.ichikawa-school.ed.jp/network/index.html>
- 袖ヶ浦市学校図書館支援センター
<http://www.sodegaura.ed.jp/sien/sienindex.html>

B県B町立B小学校

読書に関する取り組み

●学校図書館活用教育

学校図書館活用教育を校内研究に位置づけ、1・2年は国語科を窓口教科にし、1年に1つ重点単元を決めて取り組む。

●「図書の時間」の実施

週1回、全クラスで「図書の時間」を実施。専任の司書教諭と学校司書を配し、担任を加えた3人で授業を計画する。実際の授業は担任が行い、教師全体のレベルアップを図る。

●「図書館クイズ」の作成

教職員が手分けして作成するだけでなく、児童にも図書館クイズを作らせることで、答える力だけでなく、問う力も養われる。クイズを作るには、特定の分野の本を網羅的に読まなければならない、勉強になる。

●おすすめ図書の設定

おすすめ図書を読破した児童を顔写真入りで廊下に掲示。

学力向上に関する取り組み

●図書館を活用した授業

年間計画を立て、見通しをもって図書館を活用した授業を実施する。

●「図書館だより 職員版」の発行

学校図書館を活用した授業のノウハウを公開。全教職員で情報を共有し、指導力アップを図る。

子ども新聞や各種パンフレットを授業に活用

授業で地域調べを行う際、よほど特徴のある地域でない限り、地域に関する本は発行されておらず、基本的には町史を読まざるを得ません。町史は小学生が読むには難しすぎるのが悩みですが、この学校では、ボランティアの大人に来てもらい、子どもの横について読んでもらっています。また、日ごろから観光パンフレットや地元企業の様々な取り組みを紹介したパンフレットなどを積極的に収集。テーマごとに整理して、ボックスファイルに入れておけば、授業で使う際にあわせて資料集めをしなくてもすみます。

また時事問題も、ルビがふってあって、子どもが理解できるように書かれた子ども新聞の記事をストックしておけば、子どもが自分で読める資料がどんどん増えていきます。



▲司書教諭がサポートし、担任が図書館を使った授業の仕方を身につけ、実践することで、放課後、多くの児童が自主的に図書館で学習している。



▲工場見学などで配布される、授業で使えそうなパンフレット類や、地域の資料などを普段から積極的に収集し、整理分類して保管している。

●司書教諭はどんな仕事をするのか、その実務をわかりやすく紹介するシリーズの第一巻。



著／宅間紘一
公益社団法人全国学校図書館協議会
¥1,200+税

「学校図書館を活用する学び方の指導」

●魅力的で機能的な図書館にするため著者が関わった図書館大改造とともに全国の実践例を紹介。



編著／五十嵐絹子
国土社
¥1,900+税

「学校図書館ビフォー・アフター物語」